

黒ねこ作

Illustration: shimourumi



Blue Archive FANBOOK

キヴォト又決闘事変!!

美甘ネル VS 早瀬エウカ

黒ねこ作

表紙・挿絵/しもうみ

登場人物

美甘ネル Cleaning&Clearing コールサイン 00

ミレニアムサイエンススクールの三年生。メイド服の上からスカジャンを羽織ったミレニアム最強のエージェント。ユウカの監視下でブラック労働を強いられる先生を見かねてキヴォトス決闘法による三本勝負を叩きつける。

早瀬ユウカ セミナー 会計

ミレニアムサイエンススクールの二年生。ミレニアムの財政管理担当者で「冷酷な算術使い」と恐れられる金庫番。シャーレ当番の古株として、先生の家計簿から書類仕事まで幅広くサポートする。先生のサボり癖に手を焼いている。

先生 連邦捜査部シャーレ 担当顧問

キヴォトスで希少な大人の男性。推定年齢は二十代後半。すべての生徒の味方として、仕事漬けの日々を送っている。面倒な書類仕事を放置しがちで、ユウカに頭が上がらない。仕事のうっかりミスが原因で決闘を見守るはめとなる。

七神リン 連邦生徒会 首席行政官

連邦生徒会の三年生。失踪した連邦生徒会長の代行として、膨大な業務を担っている。ネルに申請された連邦生徒会規則特別条項（キヴォトス決闘法）をとある理由で許可した。

飛鳥馬トキ Cleaning&Clearing コールサイン 04

ミレニアムサイエンススクール一年生。調月リオの失踪後、C & Cに合流した五人目のメンバー。ネルと相対して三度も撃退したが四度目で敗北。和解後はネルを尊敬している。

生塩ノア セミナー 書記

ミレニアムサイエンススクール二年生。セミナーの決定事項や会議を記録する書記。瞬間記憶能力の持ち主で一度見聞きしたことは絶対に忘れない。ユウカの親友で良き理解者。

一之瀬アスナ Cleaning&Clearing コールサイン 01

C & Cの天真爛漫なサブリーダー。天性の直感力がある。

角橋カリン Cleaning&Clearing コールサイン 02

C&Cの優れた狙撃手。後方火力支援担当の調整役。

室笠アカネ Cleaning&Clearing コールサイン 03

C & Cのブレーン担当。掃除と称して爆破する爆弾魔。

才羽モモイ ゲーム開発部 シナリオライター

ゲーム開発部のムードメーカー。ゲーム関連の知識が豊富。



プロlogue	006
第一話 キヴォト久決闘法	012
第二話 手料理対決!! シャーレの夜食はどっち!?	042
第三話 キヴォト久最強のメイド! 参戦!!	064
第四話 約束された勝利の象徴	084
エピilogue	124
あとがき	132

プロローグ

日曜日。D・U・シラトリ区は学生で賑わっていた。

カフェにファミレス、コンビニやゲームセンターの店内も、暇を持て余した生徒の姿でごった返している。制服の脇や腰に銃をぶら下げて、他愛のない雑談に花を咲かせる。

キヴォトスのありふれた週末だ。大勢が注目するライブ配信を除いては――。

『クロノス報道部所属、アイドルレポーターの川流シノンです！ 注目の決闘もいよいよ大詰め！ 勝利を掴むのはどちらでしょうか！ バトルの行方はいかに!?』

スマートフォンや店のテレビ、商業施設の大型ビジョンに報道ヘリから撮った市街地の映像が映っている。不良の生徒すら寄りつかないゴーストタウン。薄汚れた廃墟の街中で銃声が連続して轟く。突如、商業ビルの七階が爆発した。外壁と窓ガラスが吹っ飛ぶ。人影が立ち込める粉塵を抜けて空中に躍り出る。

「……ハツ！ やるじゃねえか、会計！」

メイド服の上から羽織ったド派手なスカジャンが目を引く少女だった。ショートヘアの鮮やかな朱髪。しゅはつ 高校生としては小柄な体躯でサブマシンガン二丁を握っている。

容赦のない速射が粉煙を切り裂く。落下する破片を踏み台に使い、少女は常人離れした跳躍で銃火を飛び避ける。頬を擦った弾丸に怯むどころか見向きもしない。

最後の瓦礫を蹴りつけて、

「急かすなよ！　すぐに終わらせてやる！」

黄金の龍と桜の文様を刻んだ“ツイン・ドラゴン”的フルオートで撃ち返す。空薬莢をばらまきながら、勢いよく踏みつけた路面に派手な亀裂を入れて着地した。

《美甘ネルが余裕で猛攻を退けました！　ミレニアム最強は伊達ではありません！》

「当然だ。あたしを誰だと思ってる」

二丁の弾倉を交換して頭上のヘリを睨む。

小バエみたいな鬱陶しさだ。何発か撃ち込んで“掃除”してやろうか？　脳裏にそんな考えがよぎつたものの、この配信を見ている先生の存在を思い出して踏み止まる。

シノンが熱の入つた実況を一帯に響かせた。

《ですが、早瀬ユウカもまだ健在だ！　セミナーの底意地でしようか！　圧倒的な強者を相手に無傷で善戦しています！　どちらが勝者となるのか目が離せません!!》

董色の長髪をツーサイドアップにした少女——早瀬ユウカが厳しい表情で階下のネルを見据えていた。黒を基調としたブレザーとミニスカート。ミレニアム公式の白いアウター

ジャケットを羽織った彼女は、ハーフグローブを着けた両手に愛銃を握っている。

——ロジック＆リーズン。ユウカの合理と理性を司るネルと同型のサブマシンガンだ。

「へえ、無傷かよ。偶然にしちゃ大したもんだ」

ユウカの眉根がピクリと跳ねる。通信機を介して否定した。

『偶然？ いいえ……』

パラパラと足下に潰れた鉛が転がる。9ミリパラベラム弾の残骸だ。

『計算通りです。ネル先輩』

ロジック＆リーズンの銃口がマズルフラッシュで彩られる。

ネルは瓦礫だらけの道路上を駆けた。彼女の行く手を阻むように銃撃がアスファルトを切り刻む。ユウカの射撃に無駄はないが、疾走する彼女を捉えられる弾丸はない。

『すばしつこいわね！ やつぱり面積が小さいと狙いが——』

「おい、誰がチビだコラッ！ ぶつ飛ばすぞ !!」

回し蹴りで横転させた廃車で銃火を防ぐ。銃声が止んだ隙間を突いて、腰だめに構えた

ツイン・ドラゴンを猛射する。小細工なしの集中砲火がユウカに襲いかかった。

「おらおらおらおらあつ !!」

ホロー・ポイントの苛烈な弾雨だった。

拳銃弾のストッピングパワーは馬鹿にならない。ヘイローを持つ生徒で換算すると拳で滅多打ちにされるようなもので、二丁で六〇発も叩き込めばダメージはそれなりだ。アザだらけで失神しても不思議はない。当然、もろに食らえばの話だが。

「……ちつ。マジでバカみたいに頑丈だな」

硝煙がなびく銃口を下ろした先で、ユウカはかすり傷もなく平然と立っている。

『——証明完了。計算は完璧。何度もやつても同じよ』

ユウカの全身は透明な球体に包まれていた。類い稀な計算能力で構築した論理防壁で、あらゆる攻撃を阻む物理干渉シールド。彼女が「Q.E.D.」と呼んでいる切り札だ。

このシールドがある限り、有効なダメージを与えることは難しい。

ネルは空のマガジンを足下に落とした。

（めんどくせえなあ……）

渋つ面で差し込んだ弾倉から薬室に弾を送る。

シノンの大げさな実況が場を煽つた。

『ミレニアム最強の美甘ネル！ 予想外の苦戦を強いられています！ 申し込んだ決闘に破れて負け犬となるのか！ セミナーに叛逆したメイド部の明日はどうだ!?』

ユウカが両目を細めた。愉快そうに口角を上げる。

『……だそうですよ？ ネル先輩』

「ふざけんな！ ぶちのめされてえのか!?」

怒り顔で上空に発砲する。報道ヘリが慌てて距離を空けた。

『ちょっと何やってるの!? 墜落したら弁償よ！』

「ああ!? ビル一棟に比べりやマシだろうが！」

『そういう問題じやないわよ！ 破壊行為の請求書を今よりも増やさないでください！』

この決闘に負けたら、C & C が全額弁償するのよ!? 過去の修繕費も全部！』

『心配ねえよ。負けたら、だろ？』

ユウカが盛大な溜息をつく。頭が痛いと言いたげな顔だ。

『……いいわ。それなら耳を揃えて払つてもらうわよ！』

『お前が勝つたらな！ ただ、負けたらわかつてるとな？』

『……っ』

言葉に詰まるユウカを見据え、ネルが凶悪な笑みを浮かべる。

『あたしらC & C がシャーレ当番を独占する。先生の専属メイドだ』

『ネル先輩が勝てたらですよね？』

「ああ？」

睨み合う両者は一步も引かない。目に見えない火花を散らしている。お互いに譲れない大切なモノを賭している。絶対に負けられない。意地でも勝つしかない。すべては——。(——先生のために!——)

ほぼ同時だつた。二人が構えた銃のトリガーを引く。発砲炎の明滅に合わせて、荒廃した街路に9ミリの弾丸が飛び交う。激しい銃火の応酬が廃墟の壁に無数の弾痕を穿つた。ユウカは半壊したフロアから弾幕を張る。

「計算通りよ! 攻撃が私に命中する確率は……極めて低い!」

ロジック&リーズンを撃ちまくる。相手の頭上を押さえる制圧射撃。息をつく間もなく吐き出される銃弾が、瓦礫を蹴り飛ばして強引に前進するネルに高速で迫つた。

「ははっ!! 無駄なんだよ!」

銃撃を縫うように躊しつつ、ネルは不敵に笑んで突き進む。

二つの影が荒れ果てた都市でぶつかり合う。決闘はどちらかが倒れるまで終わらない。美甘ネルと早瀬ユウカ。二人が争うに至つた発端は三日前へ遡る。

それは、シャーレの近場にある公園で起きた些細な事件だった。

第一話 キヴォトス決闘法

1

水曜日の午後。

ネルはベンチにどかっと腰を下ろした。

「……つたく、売り切ればっかでロクなもんがねえな」

仮正面で片手に提げたコンビニの買い物袋を脇に置いた。

昼のピークが去ったコンビニの陳列棚に残る商品は少ない。おにぎりやサンドイッチ、弁当の九割は買い尽くされた後で、ホットスナックも唐揚げ串が残り一本だった。

めぼしい飲食店は仕込みで準備中の札を掲げている。選択肢はなかった。
(まあ、こんな時間まで寝ちまつたしな……)

一息つける場所を求めて入った公園は閑散としていた。D.U.シラトリ区の外郭に近い立地も相まって、昼休みの終わった今は見かける人影も疎らで平穏そのものだ。

ふわあ、と堪えきれない欠伸で口を大きく開ける。

眠気を誘うような暖かい陽射しが、徹夜仕事で寝不足な身体に効いていた。

「はあー……雇われも楽じやねえなあ」

思い出すのは昨晩、見慣れた番号からの着信だ。

——『お疲れさまです、ネル先輩。今どちらですか?』

電話口の相手は、早瀬ユウカ。ミレニアムサイエンススクールの生徒会“セミナー”的役員の一人で、同校の財政支出に頭を痛める日々を送る金庫番もとい会計であつた。盛大な溜息をつき、ユウカは苛立つた声で続ける。

——『C & Cに急ぎの依頼です。また、エンジニア部の倉庫に強盗が……』

最先端科学に溢れるミレニアムで事件は日常茶飯事だ。開発中の試作品が暴走、実験の失敗による事故は珍しくもないが、表沙汰になると少なからず厄介なトラブルもある。だからこそ、セミナーは直属に『Cleaning & Clearing』^{トラブルクリーニング}を抱えている。

秘密組織C & C。ミレニアムの厄介事を綺麗に掃除する腕利きのエージェント集団だ。普段からメイド服を着用するメンバー全員が荒事のプロ。ミレニアムでトップクラスの戦闘力を持ち、美甘ネルを部長に据えた「メイド部」として表向きは通っていた。

ネルは辟易とした面持ちでぼやく。

「アイツらの倉庫に武装強盗^{タタキ}つて……これで何回目だよ。六回か?」

エンジニア部の倉庫には、膨大な発明品が放り込まれていた。

ロマンと趣味を突き詰めた高性能なガラクタから、危険すぎて封印された試作品まで。部長の白石ウタハを始めとする天才達の作品が山ほど保管されているのだ。おかげで何度も強盗に入られている。セキュリティの穴を突いて中身を盗まれるたび、C&Cはセミナーの依頼で強奪された品々を一つ残らず回収してきた。

今回の強盗は大胆だった。装甲車で倉庫の壁に突っ込むと、二分で積めるものを奪つて、爆弾を置き土産に逃走。殺到する警備ドローンは三桁、爆弾の爆轟波で倉庫も半壊。強奪された一部に

スクラップ送りの警備ドローンは三桁、爆弾の爆轟波で倉庫も半壊。強奪された一部に特許申請中の発明品もあつたらしく、模造品が市場に出回つたら数百億の大損失だ。ユウカが被害総額を試算してキレるのも無理はない。

——『実行犯の処理はお任せします。盗まれた発明品は今回もすべて回収してください。壊さないでくださいね? 絶対ですよ? これはフリージャありませんからね?』

大がかりな強盗に必要なもののが二つある。

道具や頭数を揃える金と奪つた盗品を捌く故買ルート。あちこちに声をかけたらしく、実行犯のアジトは簡単にわかつた。問題は加担した人数が思いのほか多すぎた。

「……無駄に頭数を揃えやがって。結局、朝までかかつたじやねえか」

ネズミ算式に増える悪党の増援を掃除したのち、ラグビーみたいに盗品をパスしながら逃げ回る実行犯を全員始末して、ミレニアムに盗品を持ち帰ると夜が明けていた。

帰宅後はベッドに直行して、目を覚ますともう昼過ぎである。出席日数の心配はあるが、これから授業に出ても寝落ちするだけだ。それなら開き直ってサボるしかない。

「まずは腹ごしらえだ」

胃が空腹を訴えている。昼飯はもとより朝食もまだであった。

ガサガサと袋を漁つて気がついた。飲み物を買い忘れたようでツナサンドと惣菜パン、唐揚げ串しか入っていない。幸い、ベンチのすぐ近くに自動販売機があつた。

「お、ラッキー」

スカジャンのポケットからスマートフォンを出して腰を上げる。

ホットとアイスの飲み物が半々のラインナップだ。ペットボトルの紅茶と缶のココアで迷つてから、アイスココアのボタンを押した。近づけたスマホで支払を済ませる。

—— ガンツ！ ドゴンツ !!

自動販売機が前後に揺れ動いた。

「なんだ、今の？」

取出口に落ちたのは飲料缶が一本。だが、聞こえた音は鈍重でもつと大きい。怪訝な表情で自動販売機の裏をそつと覗き込む。

「……は？」

見覚えのあるシルエットが倒れていた。千切れた雑草が絡まつた癖のある跳ねた黒髪、くたびれた灰色のスーツは砂埃にまみれて、やつれた顔で気絶する大人の男——。首から提げた身分証に『独立連邦捜査部』の文字とヘイローのエンブレムがある。

「な、何でこんなとこに倒れてんだよっ!?」先生!!

大慌てで駆け寄つて先生の体を起こした。首筋に触れて脈を確かめる。

「……息はしてるな。おい、しつかりしろ! 先生!」

両肩を掴んで何度も揺すると、

「うつ。痛てて……」

「大丈夫か、先生! 怪我は? 動けるか?」
意識の戻つた先生が小さく頭を振る。

「……ネル? 学校は?」

「最初に聞くのがそれか!?! 心配することが他にあるだろ!?!」

「でも、この前も出席日数がギリギリだつて……」

「あたしの出席日数はどうでもいいんだよ！ 自分の身体を心配しろ！」

半ギレで言い返しつつも安堵する。こんなボロボロの状態で倒れていたのだ。どこかで手荒な扱いを受けて命からがら逃げて来たのだろう。冷静になるにつれて頭にきた。

「誰にやられた？ あたしがきつちり落とし前をつけてやる！」

「……違うんだ、ネル。誰かにやられたわけじやなくて……」

先生が擦れた声で説明する。

「書類を渡しに行つた帰りに……その、ふらつと足を滑らせてね……」

シャーレのオフィスは公園からそう遠くない。道路までは急な斜面となつてるので、

ガードレールを越えて転がり落ちたなら、ボロ雑巾じみた姿になるのも当然だつた。

「……仕事が終わらなくてさ。今日で五日徹夜してるから……」

「寝不足でぶつ倒れたらコケて転がつてきた……？」

ネルが握った拳を小刻みに震わせた。げつそりした顔で頷く先生を睨みつけて、

「倒れるまで働くんじやねえよ!! ちつたあ身体を疲れバカ野郎！」

公園に怒声が響き渡る。カラスやスズメが驚いて一斉に飛び立つた。

「……面目ない」

先生が申し訳なさそうに目を伏せる。ぎゅるる、と腹が鳴つた。

「おい、先生……」

「……ごめん。昨日から何も食べてないんだ」

2

「うつ、うう……美味しい。ツナサンドがこんなに美味しいなんて……」

ツナサンドを頬張ってベンチで涙する先生。空腹だとコンビニの売れ残りも高級料理に思えるらしく、惣菜パンと唐揚げ串を「美味しい！」の連呼で早々に完食していた。

隣でその様子を見るネルは、困惑と呆れの入り混じった表情を浮かべる。

「……そりやよかつたな」

「本当だよ？ 久しぶりに美味しい、んぐっ！？」

「ほら、これ飲めよ」

青ざめた顔で胸を叩く先生に、開けたばかりの缶ココアを手渡した。

「……ふう。助かつたよ。死ぬかと思った……」

「シャレになんねえよ！ いいから、ゆっくり食え！」



後ろ頭を搔いて笑う先生を、ネルは軽く睨んで溜息をつく。

肩を貸してベンチに座らせた時と比べて顔色は良くなつたものの、食事で回復したのは血糖値ぐらいだろう。明るく振る舞つたところで、疲労の濃さは誤魔化せない。
(忙しいつてのはわかるけど……どんな生活してんだよ)

キヴォトスには学園が巨万とある。生徒数や規模は違えども、学園ごとに様々な問題を抱えている。だが、生徒が頼れる“シャーレの先生”は目の前にいる一人だけだ。

シャーレに寄せられる相談は膨大だ。ましてや、先生は「すべての生徒の味方」を信念に動いている。生徒の相談内容に大小の区別をしない。激務による過労は必然だつた。

ただし何事も限度がある。ブラック労働で倒れては元も子もない。

ツナサンドも食べ終わつた先生が、人心地ついた顔で両手を合わせた。

「ごちそうさまでした！」はあく、生き返つた。ありがとう、ネル」

「おう、飯はちゃんと食えよ。腹ごしらえは大事だぜ」

「あはは……でも、全部食べて良かったの？ これ、お昼ご飯だよね？」

「コンビニで適当に買ったもんだ。気にすんな」

「そう？ それじゃ代金だけでも……」

「別にいらぬーよ。ただ、次にぶつ倒れても助けねえぞ」

先生が相好を和らげる。口元に微笑を湛えた。

「ネルは優しいね」

「はあ!? 何でそうなるんだよ!」

「次は倒れる前に呼べってことでしょ?」

「違つ、だからその……ああもう! とにかく次はないからな!」

紅潮した顔を背けて、ネルは今さらなツツコミを入れる。

「つーか、五日も徹夜すんな! ぶつ倒れて当然だ!」

「いつもじやないよ? たまたま急ぎの仕事が何件も重なつちやつて……でも、みんなの

相談に乗るのも大切だからね。気がついたら、書類の提出期限が大変なことに……」

「……当番のヤツは何やつてたんだ? 普通は気づくだろ」

先生の負担を軽減するために、シャーレには当番制で業務を手伝う生徒がいる。

いわゆる「シャーレ当番」と呼ばれる補佐役だ。先生の指名で選ばれるケースが大半で、当番制を原則としているが、得意分野によつては半ば固定化している生徒もいた。

先生がやんわりとフォローした。

「当番のみんなは頑張つてるよ。ただ、私のタスク管理が下手なだけでね……」

苦笑を湛えてから、彼は教え子を安心させようと続ける。

「心配しなくとも大丈夫だよ、ネル。私は先生だからね。大切な生徒の助けになれるなら、大変な仕事だつてへつちやらだよ。ネルも困つたら遠慮なく頼つてね」

「さつき腹ペコで地面に転がつてたよな？」

「……それは忘れて欲しいかな」

明後日の方角を見ている先生の隣で、ネルは肩を竦めて両腕を組む。

「話せよ、先生。ちゃんと聞いてやるから」

「えっ？」

「ガス抜きつてやつだよ。たまには必要だろ」

ぶつきらばうに付け加えてから、気恥ずかしさを覚えて目を逸らす。

先生が生徒に心の内をすべて喋るとは思わない。だが、些細な話のひとつやふたつなら聞けるかもしれない。一人の生徒の立場でも、その話に付き合うくらいはできる。

「ううん？ 気持ちは嬉しいけど……」

「何もねえのか？ 食いたいもんとか、欲しいもんとか」

小難しい表情で考える先生が膝を打つた。

「書類仕事で終わらない休日が欲しい」

「休みの日まで仕事すんなよ！ 休めよ！」

「じゃあ、定時帰宅かな。日付が変わつても帰れない毎日だからね」「働き方がブラック過ぎるんだよツ！！ おかしいだろうが！」

バリバリと頭を搔き筆ると、ネルは意を決した面持ちで立ち上がる。「おい、困つたら頼つていいんだよな？」

「もちろん。どんな些細なことでもね」

「はつ、そりや良かった。特大の困りごとだからな」

きよとんとした先生の右腕を掴む。ニヤリと口端を吊つた。

「付き合えよ、先生。あたしが自主休暇の取り方を教えてやつから」

「それはサボりって言うんじゃ……？」

「ああ？ 何か言つたか？」

ギロリと睨まれた先生が左右に頭を振る。

「つたく、ほらさつさと行こうぜ。まずは飯だ。行きつけの店があるんだ」
先生の腕を引いて立たせたときだ。

頭上に複数の影が差した。

「なんだ？」

思わず顔を上げたネルは、空中に浮遊する円盤を睨みつける。

某お掃除ロボットを思わせる白いボディの量産型ドローン。普段はミレニアムの校内を警備する飛行型だった。四機がこちらを包围して滯空する。機体の下部にガトリング砲が二門あるものの、敵意は微塵もないようでロックされたまま動き出す気配もない。

先生の顔は心なしか青ざめていた。無理もない。非武装の先生は丸腰だ。一発の銃弾でも致命傷となる。後ろ腰に手を回したネルは、愛銃を抜く寸前で顔見知りの姿を認めた。黒い制服の上から、白のアウタージャケットを羽織った少女が走って来る。

「せーんせーい！」

先生が油の切れたブリキ人形のようなぎこちなさで振り返った。

「ゆ、ユウカつ!? どうしてここに……」

「探しましたよ！ こんなところにいたんですね！」

驚愕に目を見開いた先生が後退る。ツーサイドアップでまとめた董色の長髪を揺らし、シャーレ当番の常連——早瀬ユウカがタブレット端末を片手に詰め寄った。

「帰りが遅いと思つたら！ ここでサボりですか？」

「違うよ！ えっと、ほら！ ネル！ ネルの相談に乗つてたんだよ！」

「ネル先輩の？ 本当ですか？」

「本当だよ！」

疑いの眼差しを向けるユウカを、ネルは睨み返した。

「何だよ？ 文句あんのか？」

「……いいえ。ネル先輩、疑つてすみませんでした」

「あれ？ 私は？」

ユウカは先生の左腕をガツチリと掴む。笑顔で圧をかけた。

「シャーレに戻りますよ？ お仕事はたっぷり残つてますからね？」

「えつと、ユウカ！ 実はこれからネルと約束があつて……」

「ダメです！ まだ八十二件も書類が残つてます。提出期限は昨日ですよ！ 今日提出は九十二件もありますからね？ ちゃんと期限を守つてください。いいですね？」

「……はい。申し訳ありません」

完璧な正論で叱られる先生はすっかり小さくなつていてる。

ネルが鋭い視線でユウカを睨めた。

「おいコラ！ 勝手に決めんじゃねえよ。あたしの用件は後回しか？」

「どんな用件ですか？ ネル先輩」

「どんなつて、そりや……い、色々だ！ 別に関係ねえだろ！」

「関係ありますよ。先生の業務が滞るのは当番として看過できないわ」

「たかが書類で大げさなんだよ。気合い入れりやすぐ終わるだろ」

「ネル先輩、昨晩の報告書はまだですか？ 後輩任せにしてますよね？」

「う、うつせえな！ 別にいいだろ！」

「よくないわよ。たまには自分で書いてください」

びしやりと反論を封じたユウカは、先生のスーツの後ろ襟を摑んだ。

「さあ戻りますよ、先生！ サボってる時間はありませんから！」

「ネル、ごめんね！ 埋め合わせは今度するよー！」

引き摺られて行く先生を、ネルは釈然としないまま見送るしかなかつた。

3

夕方。部室に顔を出したネルは、誰が見ても不機嫌だった。オフィスチエアの背もたれに身を預けると、デスク上に投げ出した両足を組んで、険悪な顔で天井を睨みつける。

（……クソッ。うざつてえことぬかしやがつて……）

昼の一件が脳裏にちらついてイライラする。ユウカの正論を振りかざした強引な態度も気に入らないが、彼女に終始言われっぱなしで従つてゐる先生にも腹が立つた。

すべて自分が悪い。そんな態度が余計にムカついた。

「ちつ……」

無意識に漏れる舌打ちが、ネルの刺々しいオーラに拍車をかける。

C & C のメンバーには見慣れた光景だ。唯一、とある事情から最近までは別行動だった五人目のエージェント——コールサイン „ゼロフォー“ の飛鳥馬トキを除いてはだが。応接セットのソファーに座る姿は西洋人形を彷彿とさせた。イギリス英吉利結びで束ねた金髪とやや表情に乏しい端正な顔立ち。澄んだ碧眼で先輩の様子をじつと見つめている。

「何かあつたのでしようか？ ネル先輩」

コールサイン „ゼロツー“ の角楯カリンが対面で顔を上げた。

紫がかつた長い黒髪と褐色肌に琥珀の双眸。キリツとした目つきでガンオイルの染みた布を手にする彼女は、愛用の対物スナイパーライフル „ホーカー“ の整備中だつた。カリンはトキの目線を辿つて理解する。

「ただの寝不足じやないかな？」

「なになに？ トキちゃん、部長が気になるの？」

一之瀬アスナが二人の会話に割り込む。コールサイン „ゼロワン“ のアスナは、ネルに次ぐ実力のベテランだ。ミルクブロンドの長髪と切れ長な水色の瞳で、グラビアモデルも

羨むプロポーションの彼女は、天真爛漫な性格かつ振る舞いも自由奔放であつた。

「現にソファーの後ろから両腕を回し、困惑するトキの頭を抱きしめている。

「あの……いえ。アスナ先輩はどう思いますか？」

「ううん？ お腹が空いてるとか？」

「どうだろう？ それなら外で食べて来ると思うけど」

「あっ、わかった！ 誰かとケンカしたのかも！」

「リーダーと？ 相手が無事じゃないだろう」

「もお、カリソ！ 私ばっかり不公平だよ！」

「……そう言われてもな。私もわからない。先生なら別かもしけないが」
黙つて聞いていたトキが、ぽんと手を打つた。

「わかりました。先生ですね」

「ご主人様が関係あるの？」

「ネル先輩の機嫌を損ねて無事で済むような人物が他にいるでしようか？」

「……筋は通つてゐるな」

「え、ご主人様とつても優しいよ？ 部長を怒らせたりするかな？」

「例えば、先生と出かける約束をしていたら？ どうでしよう？」

「ご主人様とデートつてこと？」

カリソが腑に落ちた表情で頷いた。

「そうか。先生に約束をすっぽかされて……」

「はい。ネル先輩が機嫌を損ねてしまうのも無理はありません」

「そつかあく。ご主人様にフラれたらショックだよね」

「……ああ。今はそつとしておこう」

同情を湛えた視線を送る三人。ネルは両肩をわなわなと震わせた。

「お前らなあ——」

真っ赤な顔で立ち上がり、怒髪天を衝く勢いで怒鳴る。

「さつきから好き勝手言いやがつて！ 全部聞こえてんだよつ !!」

「落ち着いてください、ネル先輩。キレてもフラれた現実は変わりませんよ」「お前だろが！ 的外れな話を始めたのはツ！」

「心外ですね。私の推理は完璧ですよ？」

「全つ然！ 一つも！ 合ってねえツ！」

「違うのですか？」

「当たり前だバカ！ ふざけんな！」

「はあ……紛らわしいですね」

額に青筋を立てたネルが、やれやれと頭を振るトキに近づいた。

「……おいコラ、新人。よっぽどぶつ飛ばされてえみたいだな？」

「見損ないました、ネル先輩。可愛い後輩を殴って気を晴らすつもりですね？」

「もう、トキちゃんをいじめちゃダメだよ！」

「そうだな。誰にでも間違いはある」

「うがあーっ！ 何なんだよお前らっ！ あたしをからかつてそんなに楽しいか！？」

ダンダンツと紅潮した顔で地団駄を踏む。その姿は駄々をこねる子供そのものだ。

「部長？」

「ああッ？ んだよ！」

振り返ったネルに微笑を返し、室笠アカネが書類とペンを差し出した。

「昨晩の報告書です。回収品リストの確認もお願いします」

「……おう。ありがとよ」

バツが悪そうな顔で受け取ると、クリップ留めされた紙に目を走らせる。

コールサイン“ゼロスリー”的アカネは、爆発物の専門家でC&Cのブレーン担当だ。オーバル型の黒縁眼鏡を掛ける彼女は、アスナやカリンとも並ぶ抜群のスタイルを持ち、

甘栗色の長髪は緩くウェーブがかっていた。柔らかな笑みを湛えてネルを見守る。

「……筋力超増強シユーズに双方向投影コンタクト？ つたく、こんなガラクタの回収に徹夜させられたのかよ。バカバカしくて怒る気にもなりやしねえ」

最後のページにサインを入れて、ネルは書類を返した。

「問題ねえよ。さつきは悪かつたな」

「気にならないでください。先生にフラれたら落ち込むのも当然ですかね」

「だ・か・らっ！ 違うって言つてんだろうが！」

「ふふつ、冗談ですよ。本当は何があつたんですか？」

「ちよつとイラついてただけだ。別に大したことじや……」

「部長？ 私たちでは力になれませんか？」

アカネが悲しそうに眉尻を下げた。アスナやカリン、トキにも見つめられる。

バリバリと頭を搔いたネルは、疲れた表情で両肩を落とした。

「……つたく、わーつたよ！ ちやんと教えりやいいんだろ！」

公園で起きた出来事を搔い摘まんで喋る。ブラック労働で倒れた先生、連れ戻しに来た

ユウカの腹立たしい正論——四人とも表情は違つても似たり寄つたりな反応だった。

アスナは目を丸くする。

「えーっ！ ご主人様、五日も徹夜してるの？」

「先生が多忙なのは知つてたけど……」

「言葉を濁したカリンに代わつて、アカネが困惑した表情で続ける。

「……先生のお身体が心配ですね」

「あたしらも色々と面倒かけてるからな。何か力になつてやりたいけど……」
悔しそうに拳を握つたネルを見つめ、トキが小さく手を挙げた。

「ネル先輩」

「ん？ なんだよ？」

「先生をシャーレから誘か……お連れして保護してはどうですか？」

「今、誘拐つて言おうとしたよな？」

「人聞きが悪いですね。あらゆる障害を排除して連れて来るだけですよ」

「それじゃ拉致だろバカ！」

アスナが元気よく手を挙げて跳ねる。

「はいはーい！ ジヤあ、私たちがシャーレに引っ越すのはどう？ ご主人様にいつでも
ご奉仕できるから安心だよね！」

「……なるほど。先生の警護も出来て一石二鳥だな」

「なるほどじやねえよ！ アスナ、カリン！ お前らもなに言つてんだ！」

怒濤の勢いでツツコミを入れるネルを、アカネが柔らかな眼差しで宥めた。

「先生にご奉仕する。これは悪い案ではないと思いますよ？」

そう言つて、彼女は眼鏡のつるを指先でクイッと押し上げる。

「部長、連邦生徒会規則の特別条項を知つていますか？」

「知らねーよ」

「——キヴォトス決闘法。連邦生徒会の規定に従い、当事者が代理人が同じ条件で戦つて勝つた側を争乱の勝者とする。キヴォトスで紛争を解決する法制度の一つです」

「……保安部で聞いた覚えがある。でも、本当にそんな制度があるのか？」

アカネは怪訝な面持ちのカリンを見ながら、

「連邦生徒会のサイトに載っていますよ。まあ疑うのも無理はないですね」

「あ？ 何でだよ？」

「使われた事例がありませんから。過去に一度も……」

銃を持たずに歩くのは、裸で外を歩くようなものとは誰が言つたのか？

武装所持と携帯が当たり前のキヴォトスでは、些細な喧嘩ですら銃撃戦に発展するなど

日常茶飯事だ。わざわざ申請をしなくても、治安を乱さなければ果たし合いはできる。

ネルが鼻を鳴らした。

「……んだよ。期待させやがつて」

「あらあら、最後まで話を聞いてくださいね。キヴォトス決闘法で勝者は、連邦生徒会長の権限で紛争の結果を決める権利が保証されます。ここまで言えばお分かりですね？」

「あたしにシャーレ当番を賭けて会計と戦えってか？」

「ユウカも規則には逆らえませんからね。キヴォトス決闘法が適用された例はなくとも、

制度は有効ですから申請もできます。部長、私の案はいかがですか？」

わずかな沈黙を経て、ネルはニヤリと口端を吊つた。

「……悪くねえな。ダメ元でやってみるか」

4

「ふあ……」

窓辺で西日を浴びながら、ネルはデスク上に足を載せた普段の体勢で欠伸を漏らした。これといった依頼や任務もなく、平穀で退屈な一日が終わろうしている。ティーカップを載せた受け皿が置かれた。アカネが自分のカップを手に微笑む。

「どうぞ、部長」

「サンキュー」

ダージリンの華やかな芳香が鼻腔をくすぐる。

淹れ立ての紅茶で唇を濡らした。温度、味ともに非の打ち所がない。「あの申請はどうなつた?」

連邦生徒会に申請して早二日。アカネに手続きを任せた。

アカネは受け皿にカップを戻して領いた。

「無事に通りました。クロノス報道部の号外が先ほど出たそうです」

「相変わらず耳が早えな。つーことは、そろそろか?」

「ええ、そろそろですね」

ぐいっと飲み干したカップをアカネに返した直後だった。

ノックもなして部室のドアが乱暴に開かれる。

「ネル先輩! ちょっとお時間いただけますかツ!!」

肩で息をするユウカがネルを睨む。デスクに足音荒く歩み寄る彼女は、先生すら裸足で逃げ出しかねない怒りの形相だ。ゲーム開発部がラスボスに選ぶのも無理はない。眼前のユウカを見上げ、ネルはニヤリと笑んだ。

「よお、会計。どうしたんだよ？」

「どうしたじゃないわよ！」

さらに一步踏み込んだユウカが、ネルの鼻先に紙面を突きつけた。

「これよ！ どういうことか説明してください！」

クロノススクール報道部の号外だ。カラフルなゴシック体の見出しが踊っている。

〔セミナー存亡の危機か!? ミレニアム最強の生徒・美甘ネルが宣戦布告！〕

〔セミナー会計・早瀬ユウカの黒い噂！ 魅惑の太ももで先生を操るあざと力！〕

〔メイド部が離反？ 冷酷な算術使いに勝算ゼロ!? ミレニアムを揺るがす抗争勃発！〕

〔ミレニアムに激震が走る！ シャーレの先生を巡る仁義なき戦い！〕

文面を眺めるネルの表情に驚きはない。ある意味では予想通り。虚実が入り混じる煽り文句を次から次によく思いつくな、と馬鹿馬鹿しさを覚えて呆れるくらいだった。ユウカに視線を戻して両肩を竦める。

「説明もへつたくれもねえよ。書いてあんだけ？」

「ま、まさか！ 本当にクーデターを起こすつもり!?」



「それは違うと思いますよ。ユウカちゃん」

「えっ？」

ひよいっと左から伸びた手が、ユウカの掲げた記事を取り上げる。いつの間に来たのか、白を基調とした制服に、ミレニアムのアウタージャケットを羽織る少女がいた。

生塩ノア。セミナーで書記を務める役員だ。

紫がかつた瞳で内容を速読するノアは、足首まで届くほどのロングヘアで、その髪色は

新雪のごとく真っ白だった。数秒で読み終えると、動搖するユウカに微笑みを向ける。

「誇張された煽り文句に騙されはダメですよ？」　はい、お返ししますね」

「彼女は物言いたげなユウカに記事を渡してネルへと向き直った。

「特別条項を申請されたんですね。ネル先輩」

「なんだよ。文句あんのか？」

ノアは眉をひそめるユウカに目線をやると、

「通称”キヴォトス決闘法”と呼ばれる制度です。当事者が代理人の決闘で紛争の終結を

図る手段の一つですね。これは連邦生徒会規則の別則にも載っていますよ」

「……聞き覚えがあるわね。でも、使われた事例はないはずよ？」

「その通りです。この法制度が適用されるケースは、学園や組織の紛争が対象ですかね。

個人間の揉め事は対象外です。でも、ネル先輩の申請は正式に受理されていますね
ユウカの顔から血の気が引いた。

「やっぱりC & Cのクーデター……」

「ふふっ、まだそとは決まつていませんよ？ 考えてみてください。もしも、ネル先輩と
C & Cが本気なら、校舎の半分はもう更地になつているはずです。そうですよね？」

「控えめにやればな」

「なるほど。被害規模を全壊に訂正しておきますね」

「そういう問題じやないわよ!?」

眉間にしわを寄せ、ユウカは険しい表情でネルに詰め寄つた。

「ちゃんと説明してください！ 何が目的ですか！」

「決まってんだろ。シャーレ当番だ」

射るような眼差しでユウカを怯ませる。

「てめえに先生は任せておけねえな。早瀬ユウカ」

「先生を？」

心当たりを思い出したユウカが、げんなりした顔で額に手を当てる。

「……そういうことね。あの、ネル先輩？ この前の件は——」

「あたしが勝つたら、C & Cで当番を独占する。先生の専属メイドだ」

「えツ」

「その場で凍りついたユウカに代わって、目を丸くしたノアが訊いた。

「専属ですか？ 先生の？」

「おう。あたしらで先生の仕事から生活まで世話してやるよ」

「負けたときはどうするんですか？」

「はつ、あたしに勝てんのか？ お前らセミナーの事務屋が？」

「部長？ そういう態度はよくありませんよ？」

やんわりと諫めてから、アカネはユウカに視線を投げる。

「これまでの任務で発生した修繕費用、C & Cで全額弁済するのはいかがですか？」

「全額つ！？ 冗談よね？ ぽんと払える金額じやないわよ！？」

アカネは眼鏡のつるを指で押し上げた。夕陽の反射でレンズがきらりと光る。

「……C & Cのメイドカフエ。利益率はよく知りますよね？」

C & Cは期間限定でメイドカフエをした過去がある。たった一度で期間が短かつたにとかかわらず、叩き出された売上と利益率は、ユウカを唸らせるほど高かつた。

ミレニアムの財政を担う会計の顔で愛用の電卓を弾いた。

「そ、そうね。まあ確かにそれなら……」

「ユウカちゃん？ ちょっとといいでですか？」

ノアはそつと耳打ちする。彼女に何を吹き込まれているのか、ユウカの顔面はみるみる青ざめたかと思えば、あわあわとした様子で真っ赤になつたりと忙しない。

咳払いをひとつ。ユウカがぐつと拳を握った。

「……ノア、間違つてたわ。やつぱり私が何とかしないと！」

「その意気ですよ、ユウカちゃん。私も手伝いますね」

「ありがとう。ノアがいれば心強いわ」

覚悟を決めた顔で振り向き、

「ネル先輩。その勝負受けて立ちます」

「……ハツ！ ちつたあマシな顔になつたな」

燃えるような夕陽に照らされる中、二人の視線が真っ向からぶつかる。

ネルは不敵な笑みを浮かべた。

「——勝負だ。早瀬ユウカ」

キヴォト又決闘事変!!

美甘ネル VS 早瀬エウカ

【発行日】

2025年12月30日 初版発行

【発行者】

黒ねこ作（黒猫機関）

Email : projectblackcat2011@gmail.com

Twitter : (@gretelproject) pixiv ID: (13552389)

【イラスト】

しもうみ

Twitter : (@simoumi_217) pixiv ID: (68404738)

【装丁デザイン】

船木渡（FLOSHIKI DESIGN）

<https://floshiki.com>

【印刷・製本】

有限会社あかつき印刷

<https://www.akatsuki-insatsu.co.jp>

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写（コピー）することを禁止します。また、本作品は二次創作フィクションであり、実在する個人、団体、歴史、原作とは一切関係ありません。